

〔薬史学雑誌, 18, 13 (1983)〕

飯沼愨齋の晩年の居所「平林荘」の現状と保存

田中俊弘, 川瀬仙吉*

The present condition and the way of conservation of "Heirin-so"——

Yokusai IINUMA's former villa in the later years ——

TOSHIHIRO TANAKA, SENKICHI KAWASE*

飯沼愨齋は大垣城下で医業を営んでいたが50歳(1932)のとき、大垣の西部、長松町に居を移した。この居所を平林荘と称した。ここで草木図説(草部20巻、木部10巻、補遺10巻)を著した。その後所有者は変わったが、この土地には大きな改変を加えられることなく今日に至っている。この平林荘を旧態に戻し後世に伝えるべくこの研究に着手した。開荘当初(1833年)の記録(後藤春草、平林荘記)によれば松、楓、桃、杏、橙、橘、楊柳、牡丹、芍薬、桔梗……など夏緑植物の多い明るい庭園であったと推察される。一方現地調査によれば次のようであった。A. 照葉樹林の植物、39種類(16%)、マンリョウ、ヤブツバキ、ツブラジイなど潜在自然植生の照葉樹林の植物のほとんど全てを含んでいた。; B. 先駆植物、121種類(50%); C. 羊歯植物、26種類(11%); D. 帰化植物、10種類(4%)、駐車場との境などに少数を認めるのみ、; E. 栽植植物、46種類(19%)、マルバチシャノキ、ナナミノキ、タラヨウ、テンダイウヤクなど一般の庭園には見られないような植物も存在した。一方高さ3m以上の樹木は56種類250本を認めた。そのうち照葉樹林の植物は149本(60%)、先駆植物56本(22%)、栽植植物45本(18%)であった。その他の過去の記録をも参考にした結果、開荘当初に比較して現在では植生遷移がかなり進んでしまっているものと考察された。

* 愨齋研究会

〔Neuropharmacol., 22, 191 (1983)〕

Isolation from Bovine Brain of a Novel Analgesic Pentapeptide

Neo-Kyotorphin, Containing the Tyr-Arg (Kyotorphin) Unit

KIYOSHI FUKUI*, HIROTO SHIOMI*, HIROSHI TAKAGI*,

KYOZO HAYASHI, YOSHIAKI KISO**, KOKI KITAGAWA**

ウシ脳からの麻酔作用を持つ新たなペンタペプチド、Neo-Kyotorphin の単離

福井 潔*, 塩見浩人*, 高木博司*, 林 恭三, 木曾良明**, 北川幸己**

モルヒネ類の麻酔作用が立体特異性に強く依存することから、中枢神経系にこれらの薬物に対し高い親和性を持つ受容体が存在している可能性が古くから推定されていた。1973年 Pert らおよび Simon らはモルヒネ受容体の存在を明らかにした。これらの知見は生体内にこの受容体と特異的に結合し、機能するモルヒネ様因子の存在を示唆するものであった。その後いくつかの研究室からモルヒネ様作用を有するペプチド類が単離されそれらの構造も明らかにされている。われわれはウシの脳から今までに見つかっていない新しい麻酔作用を持つ1種のペプチドを分離しその構造を決めたが、このものはC末に Tyr-Arg (Kyotorphin) 構造を含むものであった。このペプチドはウシの脳からメタノール抽出、ゲルろ過、イオン交換クロマトグラフィーなどを組み合わせることにより均一に単離された。われわれはこのペプチドを Neo-Kyotorphin と命名した。そのアミノ酸配列は Thr-Ser-Lys-Tyr-Arg であった。この構造は合成によっても確かめられたが、その麻酔活性(ED₅₀)は195nmol/mouse(脳内投与)であり、この活性はロイシンエンケファリンの活性とほぼ同程度であった。

* 京都大学薬学部, ** 徳島大学薬学部